

令和4年度 後期 学校評価計画

a. よくあてはまる
b. ややあてはまる

白山市立笠間中学校

令和4年度 重点目標	具体的な達成目標	担当	現状	具体的実施計画	指標・評価の観点	達成基準（a b 評価）	後期集計結果（前期）	※今年度後期の分析（成果と課題）及び改善策	判定基準	備考	
1 組織的な学校運営	カリキュラム・マネジメントを組織的に行う。	全教職員が育成を目指す子どもの姿を明確に持ち、主任を中核に同じベクトルで学校教育活動に取り組むこと。	研究部 教務主任（友田）	育成を目指す資質・能力を「思考力・判断力・表現力の育成～書く活動を通して～」とすることを全教職員で共通理解した。また研究部と連携し、それぞれの教科における「書く」活動を、6つの視点から計画的に配列したカリキュラムマップの見直しを図った。	研究部のみならず、生徒指導部、特別活動部とも連携し、育成を目指す子どもの姿を実現するための取組や手立てを組織的に計画していく。	教師は、カリ・マネの柱やグランドデザインを意識して、学校教育活動に取り組んでいる。	カリ・マネの柱やグランドデザインを意識して、学校教育活動に取り組んでいる教職員が 90%以上：A 80%以上：B 70%以上：C 70%未満：D	【教師】⑨ 評価 C(C) a 15%(11%) b 60%(68%) 計 75%(79%)	学校教育目標の実現に向けて全教員が同じベクトルで取り組むことができるよう、カリマネを図で示して共通理解を図った。研究部と連携した授業での「書く」場面の設定、行事や全校集会後に書く「語つむり」の取組、総合的な学習の時間における「まどめ」など、教科等横断的に学校生活の様々な場面で「書く」活動に取り組むことができた。しかし、肯定的な回答をした教師の割合は75%と評価Cであることから、何ができるようになるか、そのためにどのように学ぶか等について、繰り返し共通理解を図っていく必要がある。また、「書くこと」が目的にならないよう取組内容の精選を図るとともに、時間を適切な配分したり地域人材を活用したりしながら、学校教育目標の実現を図っていく。	C・Dの時、教務部会及び主任会で再検討する。	教員⑨
	組織的で効率的な学校運営の推進する。	業務を効率的に進めるために、役割分担を明確化し、関係職員との連携を図る。	企画運営委員会 主任 教務主任（友田）	・主任会議等において、諸課題やその解決に向けて話し合われたことを、迅速に各分掌等の取組につなげている。 ・会議の種類が多く、実態に合った組織となっていない。 ・各分掌や学年で共通理解を図れていなかったり、役割分担が不明瞭なところがある。	・実態にあった組織となるよう柔軟に組織を見直し、整理していく。 ・各分掌や学年で共通理解を図るために、C4thを活用しながら、予定や連絡などをこまめに確認し、教員の連携を図る。	教師は、業務を効率的に進めるために、役割分担を明確化し、関係職員との連携を図る。	役割分担を明確化し、関係職員と連携しているとした教職員が 90%以上：A 80%以上：B 70%以上：C 70%未満：D	【教師】⑩ 評価 A(A) a 24%(42%) b 71%(53%) 計 95%(95%)	肯定的な回答をした教師の割合は95%となり、組織的に学校運営が行われていると感じている教職員は多い。職員朝礼を週2回から1回に減らし、C4thやTeamsを活用することで効率的に情報共有を行い、連携を図ることができている。今後も、GIGAスクール推進委員会を機能させ、よりICT活用を推進するとともに、主任を中心とした組織運営を行うことで、組織的で効率的な学校運営を推進していく。	C・Dの時、主任会議で再検討する。	教員⑩
2 確かな学力の形成	笠間学習スタイルを基に、「書く」活動を軸として、活用力の育成を目指した校内研究を推進する。	意見を交流することで考えを深め、生徒自身の言葉で「書く」という活動を授業の中で取り入れることで、思考力・判断力・表現力を育成する。	研究部 研究主任（上出）	基礎・基本は身につけてきているが、さまざまな考えや情報をふまえて、生徒自身が自分の考えを持ち、表現することが十分にできていない。 ・教員が、授業の中で「互いに考えを伝え合い、深めた考えを自分の言葉でまとめる」活動を取り入れる。 ・教員が、授業の中で「自分の考えや思いを書き表す」活動を取り入れる。	生徒が授業の中で、「互いの考えを伝え合い、深めた考えを自分の言葉でまとめる」ことができている。	授業の中で、互いの考えを伝え合い、深めた考えを自分の言葉でまとめることができている生徒が 90%以上：A 80%以上：B 70%以上：C 70%未満：D	【生徒】⑨ 評価 C(C) a 29%(28%) b 50%(49%) 計 79%(77%) 【教師】⑩ 評価 A(A) a 48%(50%) b 48%(44%) 計 95%(94%)	校内研修会で、笠間学習スタイル「か・さ・ま」の後半部分、特に最後のまどめを「書く」という部分を重点において授業実践をおこなってきた。授業では、教員が笠間学習スタイル「か・さ・ま」を意識して取り組むことができた。しかし、前期に続けて生徒のアンケートから「考えを深め、自分の言葉でまとめる」ところまではできていないと感じている生徒が2割程度いることが見えてきた。 来年度はさらに、「考えを深め」「自分の言葉で」「まとめる」という活動について、研修会等を活用しながら学校全体で取り組んでいけるように進めていきたい。また、ICTを活用した「書く」場面の充実も図っていきたい。	C・Dの時、研究推進委員会で再検討する。	教員⑨ 生徒⑨	
	課題解決に向けた自主的な学習習慣（家庭学習）の定着を図る。	自主的に家庭学習に取り組む習慣を身につける。	研究部 研究主任（上出）	家庭学習時間が少ない傾向が感じられ、意欲的な生徒とそうでない生徒との二極化傾向である。 ・年4回の家庭学習強化週間を設け、目標時間を達成できるように支援する。 ・テストの計画を生徒自身が考え、実行できるように支援する。	生徒は、平日に予習や復習、宿題などの家庭学習を行っている。	平日に予習、復習等の家庭学習を行っている生徒が 90%以上：A 80%以上：B 70%以上：C 70%未満：D	【生徒】⑩ 評価 C(C) a 29%(38%) b 50%(37%) 計 79%(75%) 【保護者】⑦ 評価 C(C) a 25%(24%) b 45%(52%) 計 70%(75%) 【教師】⑩ 評価 A(A) a 52%(44%) b 38%(50%) 計 90%(94%)	昨年度から継続して、宿題の見える化ということで教室内に宿題を書き込むスペースを設置したり、習慣化をうながすために学習時間を競う笠間マラソンを団対抗でおこなったりしてきた。また、学年の現状をふまえた取組として、自習学習ノートの取組や学習コンテストの実施をおこなってきた。 さらに、主体性のある活動へとつなげていくために、小テストや学習コンテストを活用した取組を考えていきたい。	C・Dの時、研究進路指導部会で再検討する。	教師⑩ 生徒⑩ 保護者⑦	
	将来への夢や目標を持ち、進路実現に向けた教育実践を図る。	自己実現を目指し、将来の夢や目標に向かって学習をしている。	研究部 進路指導主事（浅見）	1年次「職業講話」（2年次「職場体験」）を実施している。自己の将来設計をしている生徒は、まだまだ少ない。 学活、総合などの時間を活用し、生徒が将来設計できる時間を確保し、現段階の自分の進路について考える。	生徒は、自分の進路について考えを広げようとしている。	自分の進路について考えを広げようとしている生徒が 90%以上：A 80%以上：B 70%以上：C 70%未満：D	【生徒】⑥ 評価 B(C) a 37%(34%) b 49%(42%) 計 86%(76%) 【教師】⑤ 評価 A a 42%(50%) b 53%(50%) 計 95%(100%) 【保護者】⑥ 評価 D(D) a 23%(19%) b 45%(47%) 計 68%(66%)	生徒の数値が上昇している。これは、1年生のフィールドワークや職業講話、2年生の進路コンパスなど、生徒自身が進路について調べたり考えたりしたことをまとめる機会が設定されていたためだと考えられる。 保護者の評価は低い。学校での取り組みを紹介するHPや各種通信に加え、生徒が作成した進路コンパスに保護者のコメントをもらう等、各家庭で進路について話をする機会を用意しているが、数値に大きな変化はなかった。	C・Dの時、研究進路指導部会で再検討する。	教員⑤ 生徒⑥ 保護者⑥	

令和4年度 重点目標		具体的な達成目標	担当	現状	具体的実施計画	指標・評価の観点	達成基準（a b評価）	集計結果	※今年度前期の分析（成果と課題）及び改善策	判定基準	備考	
3	豊かな心の育成	学級経営の充実を図り、信頼に基づいたあたたかい人間関係作りを目指す。	言語活動の基盤となる学級で、穏やかで安心できる人間関係づくりを図る。	教育相談担当（村松）	各学年、各学級で人間関係によるトラブルは減ってきているが、悩みを持った生徒も少なからずいる。	構成的グループエンカウンターによる授業、授業での自己評価や相互評価、QUアンケートを実施し、生徒の自己理解と相互理解を図れるようにする。また教員との定期的な懇談を実施する。	生徒は、学級や学年の中で認められていると思う。自分の好きなところがある。	学級や学年の中で認められているという生徒が	【生徒】⑮ 評価 C(C) a 21%(21%) b 57%(53%) 計 79%(74%) 【教師】⑰ 評価 A(A) a43% (42%) b 57%(53%) 計100%(95%)	学校学年行事、学級活動、道徳、教科の授業のなかで自己評価や振り返りを行い、また学級やグループの中で作文の読み返しや他者評価を取り入れてきた。これまでの取り組みによって、生活アンケートでも前期に比べ後期は、自己肯定感を持っている生徒の割合が各学年とも向上した。今後もQUアンケートの分析やそれをもとにした懇談の時間を確保しながら、日頃の生徒たちの様子を注意深く観察し、生活アンケートだけでなく、変化があれば迅速に職員が組織的に対応していけるようにしていきたい。	C・Dの時、生徒指導部会（生徒活動部）で再検討する。	教師⑰ 生徒⑮
		道徳教育の充実を図り、正しい判断力、行動力を育成する。	道徳の授業を要として、授業や学校行事との関連性を活かしながら、正義感のある集団づくりを図る。	道徳教育推進教師（小野）	道徳の年間授業数は確保できている。また、各教科との関連性をふまえた年間計画が作成されている。	校内研究で道徳の授業モデルを示した上で、学校全体で共通の道徳内容項目の授業を実施し、地域教材の活用をはかる。	生徒は、道徳の時間に考えたり他の意見を聞いたりしたことを意識して、学校生活を送っている。	道徳の時間で学習したことを意識して、日常生活を送っている生徒が	【生徒】⑯ 評価 A(B) a 44%(42%) b 47%(45%) 計 91%(87%) 【教師】⑰ 評価 A(A) a 25%(47%) b 75%(53%) 計 100%(100%)	各自で道徳の授業実践をおこない、学年通信を利用して各学年の授業の感想や振り返りなどを外部に発信していた。教師の評価は前期と同様に高く、意識して取り組むことができたことが分かる。生徒の評価も上がり、継続して外部に発信する機会を多くもつことを引き続き行っていきたい。また、この結果に大きく関係していることで、全体道徳の取り組みを今後も内容を考えて実施していきたい。	C・Dの時、研究推進委員会で再検討する。	教師⑦ 生徒⑯
4	規範意識の育成・主体的な生徒活動	環境美化活動や奉仕活動を通して、情操教育の推進を図る。	日々の清掃活動に無言で黙々と取り組むことで、気づきの心・我慢する心・感謝する心などの育成を図る。	生徒指導主事（村松）	無言清掃は徐々にできるようになってきた。気づいた所を隅々まで清掃している生徒がいる一方で、掃除に関係のない話をしている生徒もいる。	・掃除の最後に振り返りを行うことで、次の掃除につながるようにする。 ・無言で清掃を行うことで、つけてほしい力や意義を全校集会で伝える。また、美化委員会を中心に強化週間などを設ける取り組みを行う。	生徒は無言で行い、隅々まで意識して汚れているところを自分で見つけ、時間いっぱい掃除に取り組んでいる。	無言清掃を通して、気づきの心や我慢する心、感謝する心などの力がついた生徒が	【生徒】⑰ 評価 B(B) a 32%(37%) b 54%(45%) 計 87%(82%) 【教師】⑱ 評価 B(A) a 25%(33%) b 60%(67%) 計 85%(100%)	全校集会で無言清掃の意義を伝えたり、美化委員会の取り組みを行うことなどにより、年度当初より無言で掃除を行い、気づきの心や我慢する心、感謝する心などの力がついてきた生徒が増えた。実際に1年ではabの合計が78%→85%、2年では86%→89%、3年では82%→86%とどの学年でも増加している。今後は、さらに無言清掃によって様々な力をつけたり、評価が上がっていくような取り組みを考えていきたい。	C・Dの時、健康安全部会で再検討する。	教師⑱ 生徒⑰
		生徒会等の自治活動を推進し、学校行事や挨拶運動等の充実を図る。	学級や学年、生徒会活動において、主体的に活動する生徒の育成。	生徒会担当（吉田も）	生徒会執行部を中心に、委員会活動などの取り組みが活発になっている。活動内容の精選を図っていく際に、委員会で取り組む内容と1人1人が意識し、改善できることを区別する必要がある。	生徒会役員を中心に全校集会を運営したり、委員長を中心に専門委員会の活性化を図っていく。また、学校をよりよくするために1人1人の意識向上を図れるような取り組みを行っている。	生徒は、学級や学年、生徒会活動において、学校に参画しているという意識を持って、主体的に活動している。	学校活動において、主体的に活動しているとした生徒が	【生徒】⑳ 評価 C(C) a 35%(33%) b 41%(44%) 計 76%(76%) 【教師】㉑ 評価 A(A) a 52%(68%) b 48%(32%) 計 100%(100%)	生徒会執行部が中心となり、各委員会の委員長や学級代表と連携しながら特別活動に取り組むシステムが固まってきた。全校集会での委員会による啓発動画や宣伝、報告など相手意識を持って分かりやすく、伝わりやすい方法で行っている。また、生徒会企画では1人1人の力を合わせて、目的を達成するという経験をすることができ、全校で1つの目的を達成することができた。課題としては、学級内での係や班活動など、委員会活動の他にも学校に参画しているという意識と最後までやりきることを意識させることが必要である。	C・Dの時、生徒指導部会で再検討する。	教師③ 生徒④
5	家庭・地域との連携	保護者や地域とより良い連携を行い、学校教育に取り組む。	HP・学校・学年・学級便りで日ごろの学校活動の様子を発信する。	学年主任（山本）	HPや各おたよりで学校生活を発信している。一方で、おたよりを家の人に見せていない生徒も複数見られる。	HPの閲覧数は多いので、各おたよりをHPに定期的に載せる。	保護者はHP・学校・学年・学級便りを通して、学校生活の様子を知っている。	HP・学校のおたよりを見ている保護者が	【保護者】㉒ 評価 A(A) a 22%(26%) b 70%(66%) 計 92%(91%) 【教師】㉓ 評価 A(B) a 45%(37%) b 45%(47%) 計 90%(84%)	「学校は、おたよりやHPを発信して、学校生活の様子を伝えているか」の問いに対する保護者評価は前期とほぼ同様に高く、肯定的な割合が92%となった。また「お子さんは、学校でもらったおたよりを家の人に見せているか」の問いへの保護者の肯定的な評価の割合は76%→73%と若干低くなった。HPは閲覧者数も多く、学校の様子が掲載されているが、それに比べるとおたよりを家で見せていない生徒も多いと考えられる。各種おたよりを家の人へ渡すことの大切さを改めて生徒に指導したい。	C・Dの時、主任会議で再検討する。	教師⑳ 生徒⑱ 保護者㉒
		外部講師等、地域の人材を活用するとともに、同窓会との連携もはかり、開かれた学校づくりを推進する。	地域の人材および卒業生を講師として招聘したり、各種学校行事等を通じ、生徒の郷土愛を育む。	学年主任（村上）	2年生の「土の子講座」や進路学習等で外部講師による講座を実施している。	土の子講座の振り返りや感想で地域や講師の方々に対し、感謝の意を表現する欄を設定する。	生徒は、地域（人・自然・文化）の良さを理解し地域が好きである。	地域（人・自然・文化）が好きとした生徒が	【生徒】㉔ 評価 A(B) a 49%(43%) b 42%(45%) 計 91%(88%)	昨年度と同様に、学年が上がるほど肯定的な回答が多くなっており、地域に密着した取り組みの成果が十分に表れていると言える。1年「フィールドワーク」、2年「土の子講座」が該当する。特に「土の子講座」は本校特有の取り組みであり、今後も新たな講座を模索したり、人材の幅を広げたりしながら継続していきたい。	C・Dの時、主任会議で再検討する。	生徒㉔
学校関係者評価委員会の意見		<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が自分の言葉でまとめをする取組は成果がでている。これからも続けてほしい。 ・ネット利用時間などのルールは各家庭でしっかりと考えることが大切である。学校全体の指針があると家庭でのルール化を進めやすい。 ・SNSの利用については、危険に対する指導に加え、より有効な活用方法についても指導をお願いしたい。 ・小学生の時から、各公民館行事で地域の大人が子どもたちに声をかけている。土の子講座や同窓会からの支援などもあり、生徒の地域への愛着が育っている。 										
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた改善点		<ul style="list-style-type: none"> ・「深めた考えを書くこと」が難しいと感じている生徒への手立てを、ICTの効果的な活用も含めて工夫していく。 ・情報モラルやネット依存の課題について、家庭や小学校との連携を図りながら進めていく。 ・小学生の頃は地域の方に教わってきた。中学校では、奉仕活動など地域に返し、活躍する場面をつくっていく。 										